

6章



わたしが鳥でくらしして十二年目のとき、すべてが変わった。ほんの小さなほじまりだったけれど、わたしは、けつして忘れやしない。ほんとうにささいなことだったけれど。

その日はよく晴れて、すぐ耳になじむ歌のようなそよ風が吹いていた。

わたしはちょうど、その日そのとき、海や島々、今ここにいることのすばらしさにうつとりにいるところだった。

すると、いきなりミス・マギーが言った。「ペニキース島が、もうすぐ野鳥保護区になるそうよ。あそこに住む野鳥保護員を雇ったらしい」

そして、わたしの世界が動いた。ほんのわずかだけ。あまりにもわずかで、自分でもほとんど気づかなかったほど。

ミス・マギーの野菜畑の草むしりを手伝っているときだった。これほどしょつちゅう草むしりが必要だなんて、雑草には魔法が使えるのかと思いはじめていた。

ミス・マギーは、咲ぎ終えたばかりで、まだ種が飛んで行く前のタンポポを引きぬいた。

「ペニキース島に野鳥保護員？」わたしには、ありえないことのように思えた。「いつたい鳥たちに、どんな保護が必要だったというの？」

わたしは、保護員がカモメに夕食を作つてあげるようすを思い浮かべた。寝る前に本を読んであげるようすも。

「保護員は野鳥を数えたり、いろいろ記録をとつたりするのよ。このあたりにいる種類、産卵しているか、病気じゃないかとか、そんなようなこと」とミス・マギーが言った。

変わった仕事のように聞こえた。もしかしたら、変わった人がやるのかもしれない。

「あんなところに住むの？ 鳥といつしよに？」

「あとウサギもね。きつと仕事の一つなんですよ。あそこでたくさんウサギが生まれるようにするのよ」

これはもう絶対、ミス・マギーにからかわれているとわかった。

「ウサギがそんなことで助けがあるなんて、知らなかったよ」

ミス・マギーに耳をつねられるかと思つただけど、驚いたことに笑っただけ。

「まったくそうよね」

「その人はハンセン病がこわくないの？」